今日から女の子♂♀

みゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今日から女の子♂♀

【Ｎコード】
Ｎ６９９５Ｍ

【作者名】
みゅう

【あらすじ】
僕は振られた。
ショックのせいで変な事を声に出してしまい僕の人生は・・・
普通の男子高校生が女の子に！？

プロローグ

夕暮れの学校
「好きです！付き合ってください！」
僕は、身長１６５ｃｍぐらいスリーサイズはよく分からないがモデル体系の「可愛い」というより「綺麗」そんな言葉が似合う彼女に告白した。
僕の名前は「健太」どこにでもいる高校１年生の男子だ。
趣味は？聞かれればギター！と、かっこよく答えられるのだが実際は上手くもなく下手でもなく平凡なただの音楽好き。
仲の良い親友がいるのだが、女好きの嫌味なヤツだが、なぜか親友だ。
学校は男女共学の普通の高校だけど、全寮制でもある。

期末テストも終わり、もうすぐ夏休みも近づいて気持ちがソワソワしてた。
僕は「彼女を作って夏休みを楽しく！！」そんな野望を抱いてずっと好きだった彼女に告白したわけで・・・
夕日が綺麗に輝く中、彼女が困った顔を見せる。
（やっぱり彼氏がいるのかな）そんな思いが頭をよぎった。
彼女が口を開いて言いにくそうに答える
「・・・ごめんなさい。」

ずんっ頭の上に大きな石が落ちてきた気がした。

「嫌いじゃないんだけど、その・・・付き合うとかじゃなくて・・・今まで通り友達で。。」

彼女が僕に傷つけないようにと必死に言ってる感じがした。

「今まで通り友達で」

彼女とは同じ軽音楽部でもあったりして、よく話したりみんなでカラオケとか行ってたり

友達という関係ではあった。

「そうだね。また明日ね。」

僕は必死に言葉を探しながら答えた。

（はぁ～振られたんだな～）そう思いながら寮へと歩き始める中

彼女は小走りに去っていった。

自分の部屋に着きすぐに着替えることもせず、僕は何もする気が起きなくてベットに寝転んだ。

さっきを事を思いかえしては再び落ち込み気がつけば外はすっかり闇に包まれて夜になっていら。

学校には可愛い子や綺麗な子はいるのだけど、彼氏がいる、好きな人がいる、と噂があったりなかなか彼女を作るには難しいのかもしれない。

ふと、僕は変な事を思った。

『あんな可愛い子や綺麗な子はどんな気持ちで生きてるのだろう？』
『彼女なんていらない。自分自身が可愛い女の子になったら。』

「バカバカしい、何を考えてるんだ。」
変な事を考えて少し気持ちが楽になった

「女の子になりたい！だなんて」
着替えてギターでも弾こうと思ったとき、変な声が頭の中に直接聞こえてきた。

（受理しました。１時間ほどお待ち下さい。）

へっ！？
何だ今のは？？

次の瞬間、目の前が真っ暗になり僕は気を失った。
目が覚めた時、この時の頭に聞こえた事がなんだったのか理解することになる。

プロローグ（後書き）

初めての小説投稿です。
アドバイス、感想お願いします。
励みに頑張ります。

今日から女の子♂♀ー１（前書き）

ブログでも執筆してます。

ｈｔｔｐ：／／ｔｉｓａ６９６６．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ

／

今日から女の子♂♀ー1

夏休みを目前の暑い夏のある日

綺麗な夕暮れのなか、僕は振られてしまった。

「女の子になりたい！だなんて」

と口にだして言った瞬間、奇妙な声が頭に響き気を失ってしまった。

よくある漫画や小説などでは気がついたら女の子になってた！？

なんてことがあるが・・・

僕は気がつき目をゆっくり開け、何が起きた考える

次の瞬間、ガバッ！と体を起こし立ち上がり、体を触って確認してみた。

（ない！　ある！！）

ペッタンコな胸、そして股間には見慣れたモノ

とりあえず安心した。

でも、気になるのは頭に響いたあの声の正体だ。

僕が「女の子になりたい！だなんて」と言った瞬間に聞こえてきた

「受理しました。」

つまり、女の子になりたい願いを叶えます。って事だと思ったのだけど違うみたいだ。

じゃあ何を受理したというのだろう。
ん～きっと気のせいだ！うん！そうに違いない！！
気を失ったのは、ショックが大きかったからだな！うんうん。

無理やり納得しかけた時、

『ぷおんっ！』

可愛い怪しげな音が聞こえ、音がした方向を見ると、ぬいぐるみ？
小人？妖精？
小さな物体が空中を浮かんで僕に小さく首を傾げ、挨拶をしている。

「初めまして。ナビゲーターです。」

目の前にいるこの物体が言葉を話すという事実よりも、なぜ？目の前に意味不明なヌイグルミらしきモノがいるのか根本的な事が不思議で、話しかけられても何も反応できずにいた。

「まだ時間があるようなので少し説明を・・・」

「健太～」
女好きの嫌味な親友の登場

「健太君～・・・」
夕方、告白した相手の登場

「あ。準備が整ったようですね。」

ナビゲーターと自己紹介したヌイグルミらしき物体が話す
（何の準備だ！？一体なんなんだ？これは夢なのか！？）ますます混乱する僕。

「健太・・・あれは一体なんなんだ？」
僕は親友の問いに首を横に振ることしかできずにいた。

「それではこれからプログラムコードを展開します。」
（とりあえず・・・どうする！？）
とにかくヤバイ気がして何か行動を起こそうとする僕。
しかし、行動する間もなく
部屋には、魔方陣とも見え、ただの古代文字のような文字が光りながら頭上に浮かびはじめていた。

「ではプログラム実行！」
ナビゲーターの声と共に3人は光に包まれた。

チュンチュンチュン
さえずりが聞こえる。
朝！？
やっぱり夢を見てた？？
「おはようございます。」

視界にナビゲーターが入ってきた。
「え～と細かい説明はあとにして何が起きたか簡単に言いますね。」
寝ぼけてる僕はぼぅ～っと耳を傾ける。

「今日から女の子です。」
まだ理解できずにいる僕。
そういえば頭に違和感を感じていた。そして、ふっと目に入ってきた女の子。
（あ～僕の好きな子だぁ～）
さらに目に映ったのが壁にかけられた女子高校生の制服。

ふにゅ
胸を触ると柔らかい感触と同時にそれが自分自身についてると感じられた。
正体を探ろうと胸を見る。
急いで股間を触る。

「え～～～～～～～！！」
可愛い女の子の声が部屋に響く。

僕は今日から女の子になってしまったみたいです。

今日から女の子♂♀－2

僕は今日から女の子になってしまった。
理由は「女の子になりたい」と声に出してしまったから？

違和感のある頭、ありえない長さの髪の毛
頭を動かすと耳や首に今まで感じられなかった、なんとも鬱陶しい感覚がある
手を見れば細いスラリとした指、自然と目に入る頼りない腕
そして、ないはずモノが胸に存在している
起きたとき、女の子らしいパジャマを着ていた
そのパジャマを胸が押し上げる
さらに下、確かにそこに存在していたはず・・・
しかしない。触ってみても情けなくなる感触。覗き込んでみてもそこがどうなっているか分からない。
分かる事は今まであったのに、すっかり消えてなくなっているのだ

立ち上がれば髪の毛が揺れる感触と同時に視界が今までと少し違う
全身を写す鏡に自分の姿を映してみる
身長が縮んでいる感じがした。実際は本当に１０センチ程、縮んでしまっていた。
それよりも鏡の向こうで可愛い顔の女の子がじっとこちらを見ていた
でもどこか見覚えがある顔みたいだけど、どうみてもニヤニヤしながら見とれてしまうようなアイドルのような顔
冷静に思考が働きその顔が自分の顔であるということを理解しようとすればするほど自分の体に起こってる事に疑問を感じてしまう。

「喜んでいただけましたか？」

お客様に満足してもらった、という感じの自身に満ちた声が聞こえてきた。
健太の体を女の子に性転換させた張本人だと思われるナビゲーターの声だった。

健太は喜んでる顔というより、パニックで不安な顔でナビゲーターの方を見る。
「なんで！僕の体が女の子に！？」
少し焦り気味の口調で答えを求める

部屋にはもう一人、女の子がいた。
健太が前日の夕方に告白した子だ。その子も何が起きてるのか分からない感じであった。
この子の名前は『綾音』あやねと言う名前で、親友からは「綾姉～」と呼ばれている。
どちらかと言えば妹というより、綺麗な顔、モデル体系、性格からしてもお姉さんという感じかもしれない。
今、目の前で起きてることを一つずつ確認しようと、綾音も健太に問いかける。
「け・・んた・・・君なの？」
健太は綾音の方を向き、コクコクコクッと首を縦に振り必死にアピールしていた。
綾音はそれを見て驚きを隠せない様子だったが思った事を健太に聞こえない小声で言ってしまった。
「可愛い♪」
当然健太には聞こえなかった。
それよりもナビゲーターとのやりとりに必死になっていた。

「喜んでない様子ですがなぜでしょう？」
「僕は女の子になりたいなんて思ってなかったし、どうして勝手に

こんなことするんだよー！」
「・・・女の子になりたいと口に出した事は記録として残っているのですが？」
「そのあと否定したはずだー！」
「・・・否定された言葉は記録に残ってませんねー。」
「とにかく戻せーー！！」
「すぐには無理です。体に負担が大きすぎるので、もし無理やり実行すればどうなるか保障できません。」
それを聞いた健太は少しの間無言になってしまった。
落ち込んだ様子で「どれだけ待てばいい？」
すぐに戻るのを諦めたが、男の体に戻る希望は捨ててなかった。
「そうですねー周囲への記憶操作や環境の変化もありますし、プログラムの調整もありますので・・・」
ナビゲーターの言葉に耳を傾ける健太、それをじっと見ている綾音。
沈黙が部屋の空気を凍らせて、溶けるのを2人は待っていた。

ナビゲーターが空気を溶かそうと言葉を発する。
「ん～調べてきますので、分かり次第お伝えします。」
結局、いつ元に戻れるか分からずしばらく強制的に健太は女の子として生活することをなってしまった。

「忘れてました。女性としての名前ですが『佐奈』にしておきましたので。」
ナビゲーターの言葉に唖然とする健太。もう何も言えずに無言のまま床に座り込んでいた。
「綾音さんに色々女性としての生活を助けてもらってください。それでは。」
ナビゲーターは最後にそう言うと姿を消してしまった。
部屋に残った佐奈（健太）と綾音。

佐奈はまだ疑問だらけでいる。
（なんで僕が・・・女の子になりたい！なんて言ってるヤツなんて他にもいるはずなのに、なんで否定したのに僕が・・・　今まで女の子になりたいなんて思ったことなんてなかったのに。　なんで！？）
床に座り込んで考えてる佐奈に綾音が何かをもってきた。

「佐奈ちゃ～ん♪早く着替えないと～♪」
綾音は、もうすっかり健太という男じゃなく佐奈という女の子として見ていた。
そんな言葉に佐奈は驚きと好きな子に『佐奈ちゃん』と呼ばれることと、持ってきた何かを見て少し顔が赤くなった。
（なんでこんなに簡単にこの状況に順応するんだーー！！）
心の中ではそんな事を思っててもでも、何か恥ずかしかった。

「まずはパジャマ脱いでブラ着けないとね♪」
そう、持ってきた何かとは女性用の下着ブラジャーだった。
綾音がブラを沙耶の目の前に置き、壁にかけてあった制服を手に取る。
「多分、これが沙耶のかな？私のはあっちにあるしね♪」
とても楽しそうな綾音。
ブラを手に取る佐奈。
「これを僕が・・・。」

「佐奈？」
佐奈が顔を上げると、目の前に綾音の顔がキスできる距離にあり思わず後ろに倒れそうになった。
「今から『僕』は禁止！でも～僕でも可愛いかも～♪」

僕は、目の前にあるブラを着けて女子高生として学校に行かないといけない。
「休む。」
と言ったところで、綾音は聞いてくれそうにない。
（ナビゲータ～～～！！早く元に戻してくれ～～～！！）
佐奈は心の中で叫んでいた。

今日から女の子♂♀ー２（後書き）

もっと表現力を身につけたいですね＾＾；
次話の投稿も早くできるように頑張ります！

今日から女の子♂♀ー3

スカート（ｓｋｉｒｔ）は、腰より下を覆う筒状の衣服である。ズボンと異なり、筒が股の所で分かれておらず、両脚が１つの筒に包まれる。

そんなスカートを僕は穿いている。
穿いている事によって、女の子であることを簡単に表現してしまっている。

「はぁ。。」
ため息しかでない。
（見るのは可愛いからいいんだけどなぁ。。自分が・・・めちゃくちゃ恥ずかしい）
佐奈はそんな事を思いながら学校へと歩いていた。
風が足を通り抜ける。スカートがふわっと捲くれそうになり、とっさに手でスカートを押さえた。
（短すぎだよ。。）
心の中で呟いてスカートの中を見られないように、手で押さえたり捲くれないように歩き方を工夫したり、その仕草が女の子らしさをさらに強調していた。

「佐奈～はやくぅ～遅刻しちゃうよ！」
ゆっくりと歩く佐奈に綾音が呼びかける。
（そんなこと言ってもさぁ。。」
佐奈は初めて穿いたスカートの感触になんともいえない、落ち着か

ない感覚でゆっくりと歩くしかなかった。

寮と学校は校内建てられているわけではなく、少し離れた場所に建てられており、生徒は寮から少し歩いて通学していた。
男子寮と女子寮も同じく離れていて、真ん中に学校が建てられている。
なので、校門までは女子高生しか目につかないが、校門付近になると男子生徒も見かけるようになる。

「佐奈っ！おっはよぅ～」
挨拶されながら、ぽんっと肩を軽く触られた。
触られた瞬間に肩に伝わる感触。そう、自分がブラをしている事を思い出させる感触だった。
「！！」
佐奈が声がした方を向く。同じクラスの亜紀だった。
同じクラスと言っても話した事はほとんどなく、綾音といつも一緒にいて、仲がいいのは知っていた。
(男だった時には挨拶すらしてなかったのに、なんで！？)
疑問はあったのだけど、自分がブラをしている！という事実を再確認すると同時に今朝の事を思い出して居た堪れない気持ちになった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

今朝の事・・・思い出すと、ちょっとだけ女の子になってよかった

かな。。と思っていたのだけど・・・
やっぱり男に戻りたい。

「佐奈～今日は私がしょうがないからつけてあげるね♪」
そう言うと佐奈の手からブラを取り、パジャマのボタンを外し始めた。

パジャマの下から現れたモノ、それは男が触りたい！と思うモノ。
それが自分にある・・・
「なっ！？」
とりあえずそんな言葉しか出なかった。
そして、パジャマを無理やり脱がされ、上半身裸になった佐奈。
綾音がブラに佐奈の腕を通しホックをする。
キュッと締め付けられる感触が佐奈を襲い、佐奈の後ろから綾音がカップの中に手を入れ佐奈の胸を触る。
綾音の髪の毛の香りが佐奈の鼻をくすぐり、肩の上、息遣いが聞こえそうな距離に綾音の顔、背中に伝わる胸の感触、敏感になった自分の胸を触られて
「ひゃっ！？」
思わず佐奈は声を出していた。
「どうしたの？」
綾音が問いかけるが何も言えずにいた。

「佐奈っ次は制服ね」
渡されたのはチェック柄のプリーツスカートに、白いブラウスと紺色ベストと赤いリボン
「ベストは暑いし着なくていいよ」

ブラウスを着てスカートを穿いてみた。
下半身の頼りない感じに戸惑いながら、綾音を見ると同じように制

服に着替えていた。
ちょっと幸せな気分も味わった佐奈でした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「佐奈？今日はなんかやけに女の子だねぇ〜」
亜紀が少しモジモジしているように見える佐奈に話し掛ける。
いつの間にか横にいた綾音が
「佐奈ちゃん、今日から女の子だもんね〜〜♪」
そう言われた佐奈は顔が真っ赤になってしまった。

「綾ねぇ何わけわかんない事言ってるの？？　おっ！？」
そう言いながら誰かを見つけると走って行った。
「おっはよーー！」
遠くで亜紀の元気のいい挨拶が聞こえる。

「佐奈ちゃ〜ん♪おはよぅ〜♪」
そう聞こえたと思うと後ろから抱きつかれた佐奈。
女好きの親友だった。
「裕二！ちょっと！！アンタ何してるのよ！！」
綾音が腕を必死に解こうとするが所詮女の子の力ではどうにもならない。
何で抱きつかれてるか分からない佐奈に小声で裕二が囁く。
「健太、やさしくするからな♪」
それを聞いた佐奈は後ろの裕二の顔を見ようとした時、唇に唇が合わさった。

佐奈は裕二にキスされてしまった。

「ゆうじ～～～！！」
綾音が怒りながら鞄を振り回すがヒラリと裕二はかわすと
「さ～な～ちゃ～ん、また夜に～♪」
走って校内に入って行った。
「まったくもぅ！」
綾音は怒りが収まらない様子だが佐奈は・・・
「男とキス。。男とキス。。・・・男と・・・・」
放心状態でブツブツと言っていた。

「佐奈は私のだから！！」
綾音に手を？まれて、「へっ！？」佐奈はまた混乱し始める。
「遅刻するよ！」
２人仲良く校内へと入って行く。
そのやり取りをみてた亜紀は、
「相変わらずだねぇ～あの３人は」
ちょっと笑いながら挨拶した生徒に話していた。

キ～ンコンカ～ンコ～ン

ＨＲが始まる鐘が鳴り響く。

今日から女の子♂♀ー３（後書き）

遅くなりました～。
続きもなるべく早く書きますね＾＾

今日から女の子♂♀－４

チュンチュンチュン♪
朝を告げる小鳥のさえずりが窓の向こうで聞こえ始める。

「さ～な～・・・」
可愛らしい声で女の子の名前を呼ぶ声が聞こえる。
「佐奈～おはよぅ～・・・」
どうやら女の子は佐奈と言う子に朝の挨拶をしてるように聞こえる。

（佐奈って誰だよ。眠い。。）
僕は自分の事を呼ばれてる事に気付かず夢の中に行こうとしていた。

「佐奈！遅刻しちゃうよ！！」
少し怒った口調で佐奈を起こそうと耳元で言う。
パチっと目を開けて綾音を見て僕は自分が佐奈であり、女の子であることを思い出し
飛び起きて学校に行く支度を始めた。

「はぁ～。。」
ため息を出しながら朝起きるたびに思う。
（今日も女の子か・・・ナビゲーターはいったいどうしたんだよ。）

女の子になってから一週間がすでに経っていた。
性転換してしまってからナビゲーターは現れてない。
一週間の間、佐奈は男だった頃、経験できなかった事を数々していた。

それが良いことなら良かったのだが、ため息をつく事を経験してるのだった。

「佐奈～おはようのキスは～？？」
綾音が佐奈におはようのキスをねだる。
好きな娘にねだられたら嫌な気分じゃないはずなんだけど、佐奈はなぜか素直に喜べないでいた。
その原因の一つが綾音の行動にあるのかもしれない。

寮生活で2人は同じ部屋。
夜は部屋に2人っきりになるわけだが、最初は佐奈も告白した相手と一緒の部屋でドキドキして嬉しかった。
しかし、夜になり部屋で綾音はタンスの中から服を何着も取り出し、何か一人で呟きながら悩んでいた。
「よし！まずはこれだ！」
そう言うと服を持って佐奈に近づき
「佐奈～まずはこれ♪着替えて」
綾音が手に持っていたのは小花柄プリントのサマーワンピースだった。
「いやだよ。」
佐奈は嫌がるが綾音は許してくれそうになくしぶしぶ着替えるのだった。
着替えてる間、綾音はゴソゴソとカメラを取り出していた。
「佐奈～♪ハイ♪」
パシャッ
「笑ってよ～！笑顔じゃないと可愛くないよー」
パシャパシャ
「次はね～・・・」
そうこの一週間何度も佐奈は着せ替え人形になったいた。
そして朝にはほっぺにキスをしないと機嫌が悪くなってしまうのだ

った。
（はぁ・・・男だったらなぁ。）
この男だったらなぁ～と思ってる事も素直に喜べない要因の一つだったのかもしれない。
しかし、佐奈自身が気付いてなかった最大の要因があった。
一週間の間に体が女性化しかことによって女性ホルモンが脳まで回り、心まで少しづつ女性化してることに佐奈はまったく気がついてなかった。
それが分かるように最初は綾音の着替えや体育などの着替えでドキドキしてたのに今ではまったくドキドキすることなく、普通になっていたのである。

しかしこの日の佐奈は少しテンションが高かったのも事実であった。
ため息はついてもカレンダーを見れば今日は一学期最後の登校、終業式であった。
（そうか！着せ替え人形はしばらくしなくていいんだ！）
夏休みの間は自宅に帰るので綾音の人形になることはないのである。
（この短いスカートも明日からしばらく穿かなくていいんだ！）
心まで少しづつ女性化してるとはいえ、やはりまだ慣れてない様子だった。

そして毎朝の裕二の攻撃をかわし、教室へと辿りつく。
裕二の攻撃というのが、胸を触ろうとしたり、キスをしようとしたりと、そんな感じである。

しかし、綾音の必死な防御などのおかげで女の子初日のような事はとりあえず起きていなかった。

終業式も終わり、あとは寮に戻り荷物をまとめて自宅に帰るだけの中、教室では夏休みをどうするか？などと計画でガヤガヤと騒がしかった。
ガラッ教室の扉が開き担任の先生が入ってきた。
「静かに～！」
数分で担任の話は終わり、夏休みがスタートしたのである。

（よし！さっさと帰ろう。）
佐奈はすぐにでも自宅に帰り、平穏な時間を得ようとしてたのだが、現実はそうもいなかなった。
「佐奈～先輩が呼んでるよ～」
クラスメイトにそう言われ廊下に出ると、同じ軽音部の先輩で部長がいた。
「先輩どうしたんですか？」
佐奈は？マークいっぱいの頭の中、先輩に話しかけ用事を聞いてみる。
「夏祭りＬＩＶＥ出てみないか？ボーカルとして」
どうやら毎年この町で行われる夏祭りのイベントの一つのＬＩＶＥにメンバーとしての誘いだった。
「えっ？」
驚きの言葉しかでなかったが、次の先輩の言葉に納得した。
「作った曲が女の子ボーカル用なんだ」
軽音部に女の子は今では佐奈と綾音の一年生の二人、二年生は一人もいなく、三年生はいるのだけど、受験勉強もあり、佐奈に誘いがきたのである。
「もちろんＯＫです！で、私がベースやりまーす！！」

元気な声で答えたのが佐奈ではなく綾音であった。
それを聞いた裕二も
「佐奈ちゃんがボーカルなら俺はドラム担当で！」
佐奈は突然現れた二人に驚きながら
「ちょっ勝手に話を進めるなーー！っていうかどっから現れたーー！！」
「そうか！じゃあ決まりだな！！」
佐奈の話などまったく聞いてない先輩だった。
こうして佐奈はボーカルとして夏祭りＬＩＶＥに出ることになってしまった。

「はいはい！先輩！衣装は私が考えます♪」
嫌な予感を感じさせる綾音の発言。
佐奈はやっぱり夏休みの間も着せ替え人形になるみたいだ。

夏休みは彼女を作り、楽しく過ごす計画から女の子になってしまった今は平穏な夏休みを過ごすという夢も脆くも崩れてしまった佐奈であった。

今日から女の子♂♀ー４（後書き）

相変わらず更新が遅くてすいません＾＾；
それからお気に入り登録をしてくれて有難うございます
少しづつ増えてるみたいで嬉しいです。
次話を頑張って書きますね＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6995m/

今日から女の子♂♀

2010年10月9日12時15分発行